

天然水域におけるアユのエドワジエラ・イクタルリ浸潤状況調査

金辻宏明・山本充孝

1. 目的

エドワジエラ・イクタルリは本来アメリカナマズに対する腸敗血症原因菌である。日本では平成19年に天然河川のアユで初めて確認され、滋賀県においても平成20年9月に複数の河川でへい死アユの一部から確認されていることから、本県では平成21年度からアユに対する本菌の浸潤状況調査を行っている。調査開始から10年目となる今年度も引き続き調査を実施したので報告する。

2. 方法

2009年(平成21年)4月から2019年(平成31年)3月にかけて毎月1回程度(計142回)、琵琶湖および河川で採捕されたアユの保菌検査(総尾数:16517尾)を行った。検査魚は1検査あたり60尾を基本とし、エドワジエラ・イクタルリ保菌検査マニュアル(増養殖研究所)に従い、腎臓組織からPCRにより保菌の有無を個体ごとに確認した。また、これとは別に、追加検査として10尾をプールして1検体とした

10検体について同様に保菌検査をおこなった(60尾の個別検査すべてで陰性でもプール検体で陽性を示す場合はグラフ表記を0%の陽性とした)。

3. 結果

保菌検査の結果を図1に示す。今年度までの10年間の傾向として、毎年採捕が開始される12月の検査で陽性となるが1月には陰転し、その後の低水温期では琵琶湖および河川のアユからは本菌は検出されず、各年の漁期で高水温となる7月以降のアユで検出されはじめ、毎年8~9月で保菌率のピークとなった。

平成30年漁期は高水温期の7月上旬から陽性魚が検出されはじめ、ピークは10月であった。平成31年漁期の低水温期では採捕が開始される12月上旬に陽性魚が検出され、1月には陰性となった。

したがって、保菌魚の出現状況は変わらず今年度も保菌状況に変化はないと考えられる。

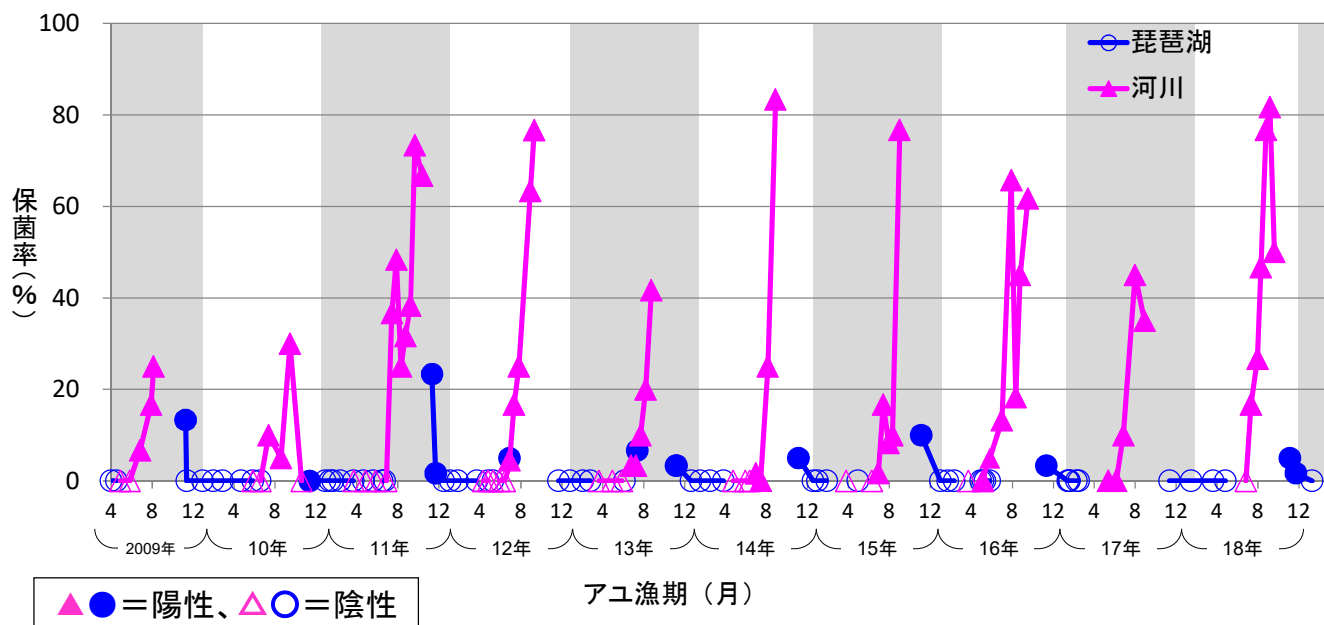


図1 天然水域におけるアユのエドワジエラ・イクタルリ保菌率の推移